



校長 坂本 晋

みたけが原便り

第8回 「ワンダー」 (11月全校朝会より)

盛り上がった土曜のスポーツフェスもですが、今日も沢山の賞状を伝達できました。皆さんの縦横無尽の活躍ぶりにわたしは嬉しい悲鳴を上げそうです。

さて、先月は熊谷和珠さんの感想文を紹介しました。約束ですので今日はもう一人の優秀賞2年1組の村松一朗君の読書感想文、「『ワンダー』から学んだこと」を紹介します。皆さんも図書館報で読みましたね。思い出しながら聞いて下さい。

「ワンダー」の主人公のオーガストは、「トリチャーコリンズ症候群」という、遺伝子の突然変異が原因で顔の造作の調和が取れなくなった病気にかかっています。そういう人がどんな苦しみか直面するか、君たちなら思いやることができますね。周りの人がジロジロ見る。宇宙人とかバケモノとか悪口を云われる。子供たちは悲鳴を上げて逃げていってしまう。こういう辛い日々をオーガストは生きることになります。彼は云います。「もし、一つだけ願いが叶うなら、僕は目立たないありきたりの顔になりたい。」哀しい願いですね。

ここを読んで、わたしは20代の頃に見た映画、「エレファント・マン」を思い出しました。これは、19世紀のイギリスで、プロテウス症候群にかかり、顔や身体が極度に變形して、膨らんでいたことから「The Elephant Man」「半分は人間で、半分は象の男」と呼ばれて、見世物小屋で見世物になって辛酸をなめたメリックという実在の人物を描いた映画です。

メリックは28歳で亡くなるのですが、晩年

の願いは、盲人(目の不自由な人)の施設に住むことだったといわれます。分かるね?目の見えない人であれば彼の姿を見て怖がったり嫌がったりする人はいなかったからです。

わたしが感心したのは、村松くんが、自分の心の声に素直に従って、正直に行動していることでした。

「きっと僕には想像が出来ないほどの心の傷があるに違いない」そう思った村松くんは、オーガストに対して「可哀想だな、気の毒だな」と思うだけでは終わりません。彼は、オーガストの気持ちに寄り添うにはどうすればいいのかと考えます。そして、他にもそんな状況に苦しんでいる人がいるんじゃないか?調べてみようと思立ちます。

その結果、アルビノ、頸部顔面病変、ウェルナー症候群、といった同じようなたくさんの病気があることを知ります。

さらに、石田祐貴さんというオーガストと同じ病気を持っている日本人がいることを知ります。そして、石田さんもオーガストも、「どんなに辛くても生きていこう!」そう覚悟を決めたのは、二人とも「あなたはあなたのままでいい」「そのままのあなたでいてくれてありがとう」、お母さんからそう言ってもらったからなのだと言います。

いいかな?君たちも同じだよ。誤解しないこと。君たちの親御さんは、君たちが優等生だから、将来プロのスポーツ選手になって大金を稼いでくれそうだから、イケメンで世間体がいいから、だから君たちを愛するんじゃないんです

ね。それは、君たちがお母さんを好きなのは、お母さんがご飯を作ってくれるから、洗濯してくれるから好きなのではないのと同じです。

何かの役に立つから、あるいは成績がいいから皆さんに価値があるのではないのです。

かりに、皆さんが病気や怪我で動けなくなったとしても、皆さんが家族にとってかけがえない存在であることに変わりはない。そのままの君らを丸ごと慈しんでくれるのが家族なんです。ですから皆さんも、自分の良いところはもちろん欠点も短所も一緒に、あるがままの自分を「これが自分なんだ！」と受け入れて、そこから自信を持って周りの人と関わって欲しいと思います。

さて、村松くんには、将来医師になりたいという希望があります。医者に必要な資質や条件って何でしょう？たくさんありますが、まずは知的な探究心、それから想像力と行動力でしょうか。

村松くんは、辛いだらうなあと相手を思いやります。想像力です。でもそこで留まることなく旺盛な探究心を発揮します。知りたいことを調べてドンドン真実を掘り下げていきます。行動です。医者を目指すんだったらこうでなくっちゃいけませんね。でなければ、病気を正しく診断し、患者の気持ちに寄り添う医者にはなれません。

突然ですが、皆さんは地球が丸いことを知っているでしょうか？では、それを実感したことはあるでしょうか？

高校時代に「地球が丸いことが実感できる方法」を教えてくれた先生がいた。理科ではなくて国語の先生です。本州で一番東の端にあるのが宮古市の鯨ヶ崎灯台、行ってごらん。そこに立つと実感できるぞというんです。

私はヘエーと思ったんですが、それきり忘れてしまいました。すると夏休みが終わった翌日、隣の席に座った同級生が日焼けした笑顔で云うんです。「オイ行って来たぞ！」

彼は、盛岡から始発の山田線に乗って宮古まで行き、宮古から重茂半島行きのバスに乗り継ぎ、姉吉の港から往復十キロの断崖の辿道を歩いて海を見に行ってきたんです。鯨ヶ崎灯台から湾曲した水平線を自分の目で見るためです。

わたしは、その時アア負けちゃったなと思いました。自分の思いに誠実に、そして素直に行動に移す。その真っ直ぐな行動力がまぶしくて羨ましくてなりませんでした。

最後に村松くんはこう書きます。「オーガストのおかげで僕の夢は広がった。」そうですね。でも広がっただけではない。夢に向かってグンと近づいたなとわたしは感じます。皆さんも、負けずに日々の学習を積み重ねながら自分の夢・願いに向かって進んでいきましょう。

(さかもとすすむ／盛岡中央高校附属中校長)

